

潜伏キリシタンの始祖神話

——深層心理学的アプローチの試み——

西 村 則 昭

The Origin Myth in Japanese Christianity:
A Trial of Depth Psychological Approach

NISHIMURA Noriaki

1 はじめに

唯一絶対の創造神を頂くキリシタン信仰は日本精神史上、画期的なもので、日本社会はその存在を許さなかった。それ故、日本にあってキリシタン宗を奉じて生きながらえていこうとする者は、潜伏キリシタンとして境界に追い込まれることを余儀なくされたのである。そうした彼らの心の在り方を知る資料として「天地始之事」がある¹⁾²⁾。「天地始之事」は九州地方の潜伏キリシタンによって口伝されたもので、民間伝承が混入されたり、独自の解釈がなされたりしてデフォルメされた彼らの聖書物語である。彼らは表面上、仏教徒を装い、毎年行なわれる踏絵も足に掛け、密かに村落単位で独自の祭儀を守って、死後の救済を希求することを究極的関心³⁾として生きていく、「後悔」の生き方を選び取っていた。それは分裂を抱えて生きていくことであった。踏絵や寺詣りをした後、「これからは神に背くことは決してしないと思ひ定める者である」⁴⁾という祈りを唱えながら、彼らはまた再び同じ罪の許しを乞うことを知っていたのである。厳しいキリシタン検索の網の目を潜って仏教徒として生きる現実とは分裂し、矛盾した彼らのキリシタン意識は、ともすれば崩壊してしまう危機に瀕していた。「天地始之事」の物語は、こうした彼らの意識を支え、それが崩壊することなく持ち堪えられていくことを可能にすべく、潜伏キリシタンの心の深層の領域で成立していった産物として見る事が出来る。このような「天地始之事」には、西洋との心の深層レベルでの出会いによって実現されるある特異な日本人の意識の在り方を伺うことが出来るように思われる。それは西洋のキリスト教的世界と、日本の社会、風土との境界に成立した意識と云えよう。本論文では、「天地始之事」に見られる人祖の物語（「創世記」のアダムとエヴァに相当するアダンとエワの物語と、アダンとエワの子どもの物語として取り入れられた兄妹始祖神話）を中心に取り上げ、深層心理学の立場⁵⁾でそこに見られるキリシタン意識成立の様相を描き出してみたい。

2 意識を成立させる「分ける」働き

キリシタン意識は日本の社会と風土にとって極めて特異なもので、それが成立する際には、特に際立った自他の区別が生じると考えられる。この節では、「天地始之事」の冒頭部分に見られるキリシタン意識を成立させる働きそのものについて見ていきたい。

「天地始之事」は次のように始まる。

そもそも、デウスと敬うやい奉るは、天地の御あるし主、人間万物の御親もつ おやにて、まします也。式百相そうの御位くらい、四十式相そうの御装よそい、もと御一体たいの御光ひかりを、分けさせたもふ所、すなはち日天也。

「式百相の御位、四十式相の御装い」とは、仏教の用語法に由来するものである。デウスの偉大さを相という仏教的概念を援用して、表現しているのである。この後に登場するジユスヘル（悪魔 Lucifer）とアダンも、各々「百相そうの位くらい、三十式相そうの形かたち」「三十三すがたの相」と述べられている。それらの相が具体的にどういうものかは、まったく述べられていないが、とにかく「分けて見る」と言う見方がここで導入されているということは注目に値する。いや、むしろそれらの相が具体的に述べられていないということは、それだけ「分ける」ということそれ自体が潜伏キリシタンにとって重要であったとは言えないだろうか。上の引用に続いて、デウスによる「十二天」の創造が語られ、これも仏教的世界観に依拠するものである。天が十二に分割されて創出されるということ、しかも十二天のうち「日天」と地獄と天国以外の具体相ははっきりしないということは、このことから潜伏キリシタンの内界で無意識のうちに、「分ける」ということそれ自体が重要視されていたことが伺われる。しかしながら、ここでの「分けて見る」と言う見方は、具体相が述べられていないことから分かるように、まだ差異を明確にして識別するという意識的なものではなく、無意識界に留まっており、それが次第に高まってくる様子をここで潜伏キリシタンは表現したのではないだろうか。

「分けられた」ものの具体相が比較的明確なのは、上の引用の「日天」と、地獄と天国、それとアダンの創造において素材として使用されたデウスの「御骨肉」である。「分けられた」ものの内容も確かに述べられ、徐々に分離分割による識別が生じてはいるが、しかしまだここでの重点は「分ける」ということそれ自体に置かれている。「分ける」ということが自らの意識の事となるのが、アダンとエワの墮罪として描かれていると考えられる。アダンとエワの墮罪はある決定的な「分かれる」という事態の表現であり、次節以降で論じようとする日本精神史において画期的なキリシタン意識の誕生を神話的に描き出すものではないかと考えられるのである。

3 墮罪即ちキリシタン意識の誕生

まず墮罪以前のアダンとエワについて見ていくことにしよう。アダンとエワは十二天の一つコロテルを与えられ、日々パライス（天国）へ、デウスを礼拝に赴く。「創世記」のアダムとエヴァは楽園の中に留まっていたが、ここではパライスと別な世界との行き来が述べられている。これは未分化な意識が比較的容易く無意識との分離と融合を繰り返す乳児期のような状態を表わしていると考えられる。アダンの創造に際して、デウスの「御骨肉」が素材として使用されたということも、デウスとアダンの同質性を表わし、融合のしやすさを暗示する。「パライスの快樂」と

云われるように、融合は甘美な自他未分の状態である。「創世記」の楽園のアダムとエヴァはそうした状態に留まっている在り方を表していると言える⁶⁾。しかしアダンとエワはそうしたまま融合から一步距離を置いて見ることの出来る視点（コロテルという視点）を持っている。それは自他未分の融合状態に留まる在り方から一步進展した黎明の意識を表わしていると言える。この違いは「創世記」の作者よりも潜伏キリシタンの方がより一層、切実な気持ちで、彼らの意識の起源を表わすイメージに自らを重ね合わせたため、それだけそのイメージには自らを反省的に捉える意識性が付加されたと考えられるだろう。

次に、アダンとエワが墮罪に到る場面を見ていくことにしよう。墮罪へと導く誘惑者は、「天地始之事」では、天使たちの頭であるジユスヘルである。ジユスヘルによって墮罪に到らしめられる過程は、二段階に分かれている。1) まず、ジユスヘルはデウスの留守に、数万の天使たちを騙して、「此ジユスヘル天帝も同然也。よって、いらいわれを拝みめされ」と云う。これを聞いてジユスヘルを拝む天使たちもある。ジユスヘルはデウスを訪ねてやってきたアダンとエワにも、自分を拝むように云う。しかしアダンとエワは「われわれはデウスさまを拝むべし」といって、ジユスヘルと口論となる。そこへデウスが現われ、ジユスヘルを拜んでいなかった天使たちと、アダンとエワは、はっと我に帰って、手を合わせてデウスを伏し拝む。「コンチリサン」という祈りの起源は、このときである。2) エワが一人であるところにジユスヘルが「われデウスの使い也」と偽ってやってくる。ジユスヘルは自分がマサンの木の実を食べているところをエワに見せることで、エワの好奇心をかきたて、それが何の実かエワに訊ねさせる。それがデウスに食べることを厳禁されていたマサンの木の実と知って驚くエワに、ジユスヘルは偽って「これをたべ候得ば、みなデウス同然の位になるがゆへに、法度也」と云う。エワはこの言葉に騙され、マサンの木の実を食べてしまう。ジユスヘルはエワにアダンにも食べさせるように言い、エワは疑うアダンに食べさせる。その時不思議なことにデウスが現われ、「いかにアダン、それは悪の実なるに」と云う。アダンは仰天し、吐き出そうとするけど、咽に引っ掛かって吐き出せない。この時アダンとエワが各々唱えた祈りが、「サルベーヒシナ」と「科のオラツシヨ」の起源である。

墮罪とはある決定的な分離による意識の誕生を表わしていると考えられる。そうした分離以前の黎明の意識は、上に述べたようにアダンとエワのペアで表わされる両性具有的なものである。まずその分離の第一段階から見ていこう。アダンとエワが「われわれはデウス様を拝むべし」と云って、ジユスヘルと口論になるというのは、分離の葛藤を表わしている。その口論の場に、デウスが現われ、ジユスヘルの企みは成功しなかった。分離しようとする意識は、一旦元の状態へと連れ戻されたのである。ジユスヘルの云うままにそれを拝むということは、ある極端な分離である。そうやってしまっただけでは、救済への道は残らない。アダンとエワの意識はそうした極端な所にまで行ってしまふことは免れた。しかし一旦分離しようとしたことは、強烈な罪悪感を生じさせることになった。この時にコンチリサンの起源があるのだと語られていることから、そうした罪悪感が意識の側にあったことが伺えるのである。

コンチリサンとはキリシタンがきわめて大切にしていた祈りである。姉崎（1952）が「宗門大要」と名付けて紹介する書⁷⁾には、「コンチリサンと申す事御座候。是れは萬事にこへて御大切に存じ奉るべきデウスの御内証をそむき奉ることをふかく悔ひ悲しみ、ハライツの快樂を失ひ、インヘルノ（地獄）の苦しみを受くべき所にかゝらず、デウスを背き奉りし事を後悔仕るをコ

ンチリサンと申し候」(p.110)とある。また教理書である「どちりいな一きりしたん」⁸⁾には、「科はデウスに対し奉りての狼藉なるによて、それを悔ひ悲しび、以後二度犯すまじきと思ひ定め、やがてコンヒサン(告白)を申べき覚悟をもて科を悔ひ、悲しむ事、是コンチリサンとて、科を赦さるゝ道也」⁹⁾とある。潜伏キリシタンには、コンヒサン(告白)を行なう神父が欠如しており、神の許しを乞う切なる願ひは、コンチリサンに係っていたのである。片岡によると、「このオラッショだけは、潜伏時代のキリシタンの多くが、暗誦しており、寺詣り、踏絵などを始め、信徒としてなすべからざることをしてデウス(神)に対して罪を犯したとき、特に臨終の時には、必ずこのオラッショを誦えた。1865年のキリシタン復活によって宣教師の指導下に入ったカトリック信徒も、大正の始年頃まではこのオラッショを暗唱し、祈っていた」¹⁰⁾コンチリサンを起こすべき心得とその祈りの言葉について書かれた書「こんちりさんのりやく」¹¹⁾は、九州地方の潜伏キリシタンの二大系統のうち、外海・五島・長崎系にのみ伝承されており、片岡はもう一方の生月島・平戸系がより一層民間信仰と混淆し、信仰内容の変容の度合いが大きくなったのは、「こんちりさんのりやく」を持たなかつたことがその一因として考えられるのではないかと推測している¹²⁾。生月島・平戸系が土俗化によってより日本的なものの方に傾斜することによって安定した信仰形態が出来上がっていったのに対し、外海・五島・長崎系には、より強い西洋的なものの牽引力が及んでいたというふうに見ることが出来る。日本的なものとの間の緊張は、外海・五島・長崎系の方がより大きかったのである。「天地始之事」も外海・五島・長崎系にのみ伝承されており、それは日本的なものとの境界の希有な緊張の中で生まれた産物なのである。

さて、「天地始之事」に戻るとして、コンチリサンを称えたアダンとエワにデウスは云う、「ジユスヘルは拝むとも、マサンの木の実、かならずく事なかれ。さて、エワ・アダン、子どもをつれてきたりなば、よく名をつけ得させん」墮罪に到る第二段階で起こることは、このデウスの言葉の中に暗示されている。これを聞いていたジユスヘルが、マサンの木の実を持って、エワの許へ、再度誘惑に乗り出すのである。墮罪は元々はデウスによって惹起されたという感じが強い。デウスは上に考察したように「分ける」こと、ここでの場合は意識を分離させることの根源的な力を司るものなのである。次に上のデウスの言葉で、アダンとエワの子供の名付け親になってやろうと云っている点について考えてみよう。デウスがこのように云うことで、「なさけもふかき御ことばに、みな一同にかへりけり」とあるように、高まった罪悪感と緊張が緩和される。田北の云うように、アダンとエワの子供には既にチコロウ、タンホウという名があるので、デウスが授けようというのは洗礼名である¹³⁾。しかし、この名付けはこの物語の中で行なわれることはなく、このデウスの言葉はジユスヘルの再度の誘惑において利用されることになるのである。すなわち、ジユスヘルは再度エワの許を訪れたとき、「われデウスの使也。其方子ども、よく名をさづけ得させすべしとの御上意、はやはや子どもをつかわし申せ」と云うのである。デウスの慈愛に満ちた言葉も、ジユスヘルの誘惑の口実に使われるのに終わってしまうのである。チコロウ・タンホウは次節で述べるように、アダンとエワで表現されるキリシタン意識を引き継ぐものであるが、洗礼名を与えられずに終わってしまうということは、潜伏キリシタンのデウスとのつながりの緩さ(もちろん、デウスとつながりを得たいという切実な気持ちは持っていたにもかかわらず)、また外的に見れば教会と隔絶した在り方を表わしているのではないだろうか。

墮罪に到る第二段階について見ていくことにしよう。ジユスヘルの巧妙な誘惑によって、まずマサンの木の实を食べるのはエワである。樂園における誘惑を描く西洋の宗教画において、よくエバと蛇の顔が同じように描かれているが、これはエバと蛇の親近性を表わすものである。「天地始之事」においても、やはり女性的要素は罪の原理に近いものと見做す見方が受け継がれたのである。

ジユスヘルはエワに偽って「此マサンの木の实は、デウスや、此ジユスヘルがものなり。これをたべ候得ば、みなデウス同然の位になるがゆへに、法度也」と云う。エワはこれを信用し、喜んでマサンの木の实を食べる。そうしてエワはジユスヘルに聞いた事の次第をアダンに物語り、アダンは「うたがいながら」、マサンの木の实を食べるのである。Jacoby (1980) によると、「創世記の樂園神話では、「墮罪」への最初のきっかけは疑いの念であった。完全な樂園の秩序が、ふと疑われたのであり、しかもその疑いを人間の耳に吹きこんだのは蛇であった」(p.151)そしてJacobyはドイツ語の疑いZweifel(この語は、「二Zwei」と「落ちるfallen」の合成語である)について、Dudenの語源辞典を参照しつつ、「つまりこの言葉は「落ちて二つに分かれる」すなわち「一つの統一体から転がり出る」ことを意味し、そこでまた「二様の可能性を前にしてどちらか決めかねている」ことを意味しているのである。そこで蛇はまた、人間の性情に根ざしている疑惑を抱くポテンシャルティー、問題視する能力、をも象徴している」(p.151)と述べている。こうしたJacobyの考え方は、「天地始之事」の解釈にあたって、大いに参考になる。本節では以下に、墮罪を意識が「分かれる」事態として、そして男女の両極化が生起する事態として解釈しようとしているのであるが、こうしたJacobyの考え方を考え合わせると、アダンの疑いはそうした事態の生起を先取りするものとして見られ得るのである。しかしながら、「創世記」ではアダムが疑いを抱いたということは明言されてはおらず¹⁴⁾、「天地始之事」とは異なる。これは先にも述べたように、「天地始之事」は、潜伏キリシタンが自らの特異な意識の在り方を表現したいという切なる願いを抱いていた中に、生じてきた産物である故に、「分かれる」事態の兆しを自らの事として、彼らの意識イメージを荷なうアダンにおいて、表現したためではないだろうか。エワから手渡されたマサンの木の实をアダンが食べた直後の場面を次に引用しよう。

かかる所に、ふしぎや、デウスはいづくともなく御幸にて、「いかにアダン、それは悪の实なるに」と仰有。アダンはつと仰天して、はきいださんとすれども、のどにかゝり、そのかいなく、あらかなしや、エワもアダンも、たちまちに天の快樂をうしない、其ざますぐにひきかわり、其時サルベーヒシナのオラツ所をつとめ、天にさげび地にふして、血のなみだをながし、千悔すれども其かいなく、科のオラツ所の始り此時也

墮罪に到る第一段階と同様、ここでもデウスが立ち現われる。そしてそれが不思議なことだと語られている。この「不思議」ということは、単にアダンがマサンの木の实を食べた直後にデウスが現われたという巡り合わせについて云っている以上の意味があるのではないか。つまり、デウスの出現によって意識のある決定的な分離がもたらされるのであるが、そうした事態に伴うある感情、すなわち他ならぬ自分が存在すること、solus ipse(自分一人だけ)¹⁵⁾の開示体験の底知れぬ、強烈な不可思議感をも、含意するものではないだろうか。

アダンが仰天し、慌てる様はさわめてリアルで、劇的である。アダンは吐き出そうとするが、それは咽に引っ掛かって出すことは出来ない。アダンの様相は変化し、七転八倒の苦しみを苦し

む。こうしたアダンの有様は、自らの内に自らによっては統御出来ない、抜き差しならない異物の存在に気づいた新たな意識、キリシタン意識の誕生を表わすものと考えられるのである。

ここでサルベーヒシナ¹⁶⁾と科のオラツシヨ¹⁷⁾という二種類の祈りが唱えられたことに注目したい。潜伏キリシタンの祈祷文集¹⁸⁾に、科のオラツシヨは「男の告白に申す。コンチリサンに加えてつとむ」、サルベーヒシナは「これはコンチリサンに加える。女の告白につとむ」と説明書が付されている¹⁹⁾。上の引用で、これら二種類の祈りを唱えた主語は明確でないが、この祈祷文集の説明書を考え合わせると、サルベーヒシナを唱えたのはエワで、科のオラツシヨを唱えたのはアダンだということになると考えられる。そうすると、上の引用で、「其ざますぐにひきかわり」とあるのはエワのことで、「天にさげび地にふして、血のなみだをながし、千悔すれども其かいなく」とあるのはアダンのことだと分かるのである。その後、エワはデウスによって「犬となれ」と「中天」に蹴りこまれるが、エワにはメタモルフォーゼが起こったのである。恐ろしいメタモルフォーゼは、ジュスヘルや十ダツ（キリストを訴えるユダ）にも起こっている。ジュスヘルは「鼻ながく、口ひろく、手足は鱗、角をふりたて、すさまじく有様にて」というふうになり、十ダツはキリストを訴人して、褒美の金をもらっての帰り、「にわかには其ざまひきかわり、鼻たかく、舌ながく、いかゞはせんとおもへども、いたすべきようなく」というふうになる。恐ろしいメタモルフォーゼは、デウスに背反する程度の大きい場合に起こるのである。アダンの墮罪の程度はそこまでは大きくはないのである。

アダンとエワが別々の祈りを唱えたということは、ここに男女の二極分離が生起する様子が描かれていると見ることは出来ないだろうか。上の引用で、各々の祈りを唱えた主語が明確に語られないのも、男女の二極分離に到る途上にあるからだとも考えられるのである。Jacoby (1980) は、「本来の意識化は「善悪の知識の木」の下ではじめて起こる。そこから今度はその知恵の結果を、アダムとイブが単なる「一つの肉」ではなく、多くの点で対照的に異なるのだという事実を、荷なって歩かねばならない」(p.134)と述べている。潜伏キリシタンは、現在のこの深層心理学者が「創世記」の中に読み取ったのと同様の心理過程を、宣教師によって伝えられた楽園物語の中に、感じ取り、彼らなりの仕方での心的過程を表現したのである。

男女の両極化と同時に、中天がまず犬と化したエワという内容を伴って存在するようになる。これは意識の無意識からの独立の程度がある一線を越え、個としての意識に対峙する他者としての無意識の在り方が、ここに生じたというふうと考えられ得る。この中天の領域には、エワに続いて、西洋の竜のようにメタモルフォーゼし、雷神となったジュスヘルや天狗²⁰⁾となった墮天使たち、マサンの木の実がデウスによって追いやられる。それらは生誕したキリシタン意識にとって他者である無意識の内容物となったのである。

以上、キリシタン意識が誕生する過程を見てきた。そうした過程を物語る「天地始之事」の語り口は紙谷 (1986) の云うように、「まるで琵琶の調べで語られたかと思われるほど緊張した韻律をともなっている」(p.47) ると云うことが出来よう。

4 日本の風土におけるキリシタン意識誕生の捉え直し

前節においてアダンとエワの墮罪をキリシタン意識の誕生として解釈したのであるが、そうし

た意識が次に彼らの男女の子供、チコロウ・タンホウを通して表現されるという点について、本節では論じていくことにしよう。マサンの木の実を食べてしまったエワとアダンが痛悔極まりない祈りを唱えたすぐ後の場面を次に引用しよう。

や、ありて天帝にむかい、「我いま一どなにとぞバライゾの快樂を、うけさせたまわれかし」とぞねがいける。天帝きこしめされ、さもあらば、四百余年の後悔すべし其節ハライツに、めしくわゆるなり。又エワは中天の犬となれと、蹴さげられ、行衛もしれずなりにける。

デウスに願いを立て、「四百余年の後悔すべし」と云われたのは、主語が明示されていないが、アダンであろう。エワはデウスによって「中天の犬となれと、蹴さげられ、行衛もしれずなりにける」と語られるが、アダンもまた、彼のその後について以下に何の記述もなく、行方不明となる感じである。上の引用に続いて、「エワの子どもは、これよりしたの下界にすみ、畜生を食し、月星を拝み、後悔して、まいるべし…」と、チコロウ・タンホウに対するデウスの言葉となっている。「天地始之事」ではこの後、下界が舞台となり、まずチコロウ・タンホウについて物語られることになる。アダンの「後悔」はチコロウ・タンホウの「後悔」と等価であると考えられる。キリシタン意識の表現は、チコロウ・タンホウによって受け継がれると考えられ得るのである。

チコロウ・タンホウの物語は、紙谷（1986, 1990）によると、東南アジアから、華南、日本の南西諸島にかけて拡がっている兄妹始祖の伝承が、「天地始之事」の中に再構成されたものであるという。心理学的に見るならば、潜伏キリシタンは彼らの生きた風土が生んだ、意識の起源を物語る神話を、「天地始之事」の中に入れ込むことによって、キリシタン意識をより自らの風土に根付いたものとし、我物としたのではないだろうか。

チコロウ・タンホウの物語を次に引用しよう。

さて、エワの子どもは立分、合石の石ほとりでゆきあい、かゝる所に、天より拔身おちつらぬき、これぞ、まへかた、天帝のふしぎの御しらせと、兩人はつとおどろきて女は、おもわずもちたる針をなげかけ、胸に打ちこみ、血をながし、又男は櫛をなげかけ、たがいに他人となり、それより女閉口して夫婦の契をなしけり。こいをしゑのとりをみて、あまたの子共をもふけたり。

下界に降ろされたチコロウとタンホウの別離は、アダンとエワの墮罪による男女の両極化を引き継いで、表現するものと見ることが出来る。そして上で考察したように男女の両極化は、意識のある決定的な分離と一つの出来事であり、チコロウとタンホウの再会は、あまりに風土から立ち離れたキリシタン意識が、風土との結びつきを回復させる出来事として見ることが出来る。二人が再会する地点となるのは、「合石の石」である。「合石」とは田北によると、温石と呼ばれる岩石のことで、「扁平で使い易く、熱にも強いので、竈、敷石、墓石などに用い、黒崎地方では今も珍重されている」²¹⁾「昔五島へ移住するキリシタンは、舟に積んで持った行った」²²⁾という。子孫繁栄、すなわち意識の形成拡大の拠点として、「天地始之事」を伝承した潜伏キリシタンの地上の故郷の象徴とも云うべき「合石」が選ばれたのである。そうしてキリシタン意識は下界すなわちこの世での地域的特定化を受けることによって、この世における位置付けを得るのだと考えられ得る。

二人が再会したとき、天から剣が落下する。このとき「兩人はつとおどろきて」とあるが、ア

ダンがマサンの木の実を食べたところをデウスに咎められたときも、「はつと仰天し」たとあり、この二場面での驚きは同様の事態の生起を暗示しているのではないかと考えられる。すなわち男女が互いに異質な他者として分離する動きが、チコロウ・タンホウ物語でも生起しているのである。しかしながら、チコロウ・タンホウの「他人」への分離の動きは、「まへかた、天帝のふしぎの御しらせ」すなわち「下界に合石という石あり。これを尋ねてすむときは、かならずふしぎあるべし」というデウスの明確な教示にしたがって起こっており、ここに罪悪感はない。ここで男女の分離は、男女の性交渉、そして子孫繁栄というポジティブな展開を遂げていくのである。

「天地始之事」では明確に述べていないが、「他人」となる前のチコロウ・タンホウの状態は、シャム双生児のように体が結合しているイメージに幾分近い。天から落下した剣によってそれが物理的に分離されたという連想も容易く起こってきはしないだろうか。Eliade (1962) は、古代のラビによる聖書註釈文に見られるシャム双生児的なアダムとイヴと、神によるその分離について紹介している。すなわち「アダムとイヴは背中合わせで肩はひっついていて、そこで神は斧の一撃のもとに彼らを切断した」、また別の説で「最初の人間(アダム)は右側に男、左側に女であったが、神はアダムを半分に裂いた」(p.134)

しかし「天地始之事」ではそのようには語られず、二人の分離は各々櫛と針を投げ合うという呪的儀礼を行なうという過程を経て行なわれている。チコロウ・タンホウは身体が結合していたと述べられているわけではないので、ここでの剣は分離するものとして些か曖昧であり、その不徹底性を補う形で、呪的儀礼が行なわれているとも考えられ得るのである。

剣と呪的儀礼によって「他人」となったチコロウ・タンホウは夫婦となる。「こいをしゑのとりをみて」とは、「恋の仕方を教える鳥の姿を見て」ということであり、鳥が交尾しているのを見て、性交の仕方を知ったというのである。南西諸島に伝わる兄妹始祖神話で、動物の交尾を見て、性交の仕方を知るというモチーフはよく見られる²³⁾²⁴⁾。

このようにアダムとエワの墮罪に表現されるキリシタン意識の誕生は、日本の風土に適うものとして捉え直されたのである。

〈註〉

- 九州地方における潜伏キリシタンは、生月島・平戸島系統と外海・五島・長崎系統に大別される。前者の方がより厳しい弾圧状況の下にあって、信仰の土俗的変容の程度はより著しい。そこでは納戸神という聖母子像などの画像を祭ることが特徴となっている。後者の特徴は彼らの信仰生活を規定するものとして、教会歴に由来する日繰帳を持っていたことである。「天地始之事」は後者にもみ傳承された。
- 秘伝書であった「天地始之事」を初めて公に紹介したのは、田北(1954)である。田北はフィールドワークの中で、「天地始之事」の筆録本を9本得、分析検討を加えた研究書を公刊した。田北の得た筆録本のうち1本が、「日本思想大系25 キリシタン書・排耶書」(海老沢他校注, 1972, 岩波書店, 以下「思想大系」と略記)に田北耕也校注で収められている(pp.380-409)本論文の「天地始之事」の引用は「思想大系」より。また「日本生活史料集成 第18巻 民間宗教」(安藤他校注, 1972, 三一書房, 以下「史料集成」と略記)には、田北とは別の経路で得られた「天地始之事」の筆録本が片岡弥吉校注で収録されている(pp.1001-1019)現在、「天地始之事」の研究としては、民俗学的立場からの紙谷(1982)がある。
- 「究極的関心」とはTillich(1957)による信仰の定義。原語はultimate concern。「究極的に関わっ

- ている状態 the state of being ultimately concerned」とも云われる。
- 4) 潜伏キリシタンにとって最も重要とされた祈り「コンチリサン」(3節参照)に次のような一節がある、「しかれど、罪人いまよりわが進退を改め、二たびモルタル科(死に到る罪)をおかせして、かつてデウスの御内証をそむくことあるまじきと、堅くおもい定め申もの也」(海老原他校注, 1970, pp.379-380)。
 - 5) 深層心理学的思考は、Jungが「自伝」(1963)で「私は自分自身の無意識の心像に対する強烈な関心を出発点にした」(p.11)と述べているように、研究者自身の内的体験に根ざすものであり、それを意識化しなくてはならない、言語の公開性の内へもたらさなければならないという彼自身の内的要請にしたがって培われていったものである。本論文は「天地始之事」において、筆者の内界における力動と共鳴し合う事柄について、筆者自身の分析探求と一体の作業として、考察が行なわれる。
 - 6) 「創世記」の樂園については、ユング派の立場で Neumann (1955) や Edinger (1972) によって考察されている。両者ともユングの云う「自己 (das Selbst, the Self) と自我」の観点で論じている。Edinger による「自己と自我」の簡潔な説明を紹介しておこう。「自己とは、心の全体(意識と無意識)を秩序づけ統一する中心であり、自我とは意識的人格の中心である。即ち、換言すれば、自我とは主観的同一性の座であり、自己とは客観的同一性の座である。こうして自己は心の最高の権威であり、自我を従わせる。自己は最も端的に云えば、内的に経験される神性であり、imago Dei と同一である」(p.3) Edinger は宗教性に焦点を当てた論じ方をしている。Edinger によると樂園は「自我の自然や神性との原初的一体 original oneness」を表すものであり、「自己と一つである最初の無意識的、動物的状态」である (p.17) 一方 Neumann は樂園にあることを人間の乳児期の心の在り方と軌を一にするものと捉え、そうした在り方を「一体的現実 Einheitswirklichkeit」と呼んでいる。そして Neumann は云う「幼子にとって世界も母親も自らの身体も、全く区別できない前-自我的な拡散された在り方は、ある種快樂に満ちた状態であり、そこにおける特徴は、すべてがすべてと結合しており、自己だけがあるということである」(S.108)。
 - 7) 「宗門大要」は転びバテレン(棄教した宣教師)、おそらくはジョゼフ三右衛門が、宗門改役北条安房守を前にして語ったキリシタン宗門の大要を筆録したもので、明暦四年(1665)の資料(姉崎, 1952, pp.105-130)。
 - 8) 「思想大系」所収, pp.13-81。
 - 9) 同書, p.61。
 - 10) 「史料集成」中、「こんちりさんのりやく 解題」p.977。
 - 11) 「思想大系」所収 pp.361-380, 「史料集成」所収 pp.977-988。
 - 12) 註10と同じ, p.978。
 - 13) 「思想大系」補注 p.507。
 - 14) 聖書の「創世記」において「疑い」は、蛇がエバに問う次の言葉に現われている。「園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか」(日本聖書協会, 1975, 3:1) 蛇はこのように巧妙に問い掛けることによって、エバから禁断の木の实が実在するという知識を引き出し、神の言葉に背く行為へと導いている。
 - 15) solus ipse とは Heidegger (1979) の思惟の中から借りてこられた語句である (S.188) 不安 (Angst) が人間存在を開示する (erschließen) 仕方を Heidegger はこの語句を用いて述べている。Heidegger の分析記述する不安は、耐えがたい、まったき虚無である。そこには「不可思議」の感を味わう余裕はないように思われる。実際 Heidegger は solus ipse の不可思議性ということは、特に何も述べていない。この不可思議性を味わうゆとりは、実に宗教的な方向性を持つところ、自らを越えた存在の視点を持つところに生じるものではないだろうか。親鸞は云う、念仏は「不可称不可説不可思議」(歎異抄第十章)と。
 - 16) 「サルベーヒシナ」は Salve Regina にあたる。Salve Regina は西欧で12世紀に作られ、流行した聖母マリアに捧げられる祈り(「思想大系」頭註 p.384)。
 - 17) 「科のオラツシヨ」は現行の「告白の祈り」にあたる(「思想大系」頭註 p.384)。

- 18) 「史料集成」『外海のオラシヨ (一)』pp.917-925。
 19) 同書, p.920。
 20) 墮罪への誘惑者は「宗門大要」(註7参照)でも(p.118), キリシタン許教時代に出た教理書「どちりいなーきりしたん」でも(『思想大系』p.43), 「天狗」となっている。キリシタン側の日本人論客ハビアン(1565-1621?)の護教的教理書「妙貞問答」(同書所収 pp.113-180)では, 誘惑者ルシヘルを「天魔」と呼び(同書, p.168), 地獄に落とされたルシヘル及び墮天使達を「天狗」と呼んでいる(同書, p.167)紙谷(1986)は「キリシタン用語としての天狗は二種類の文脈の中からとらえなければならない。すなわち, 一方ではキリシタンの宣教師達がデウスに敵対する悪魔を翻訳しようとした〈天狗〉があり, また一方では日本人の民間信仰の中で形成され, 宣教師達の〈天狗〉概念を受けとめたところのものである」(p.195)と述べ, 論を展開している。
 21) 「思想大系」頭註 p.385。
 22) 同書, 補注 p.508。
 23) 「日本伝説大系15 南島編」(福田編, 1990)には, 多くの兄妹始祖神話が収録されている。兄妹が性交の仕方を教えてもらう動物は, 千鳥(p.83)や海鳥(p.91)といった鳥をはじめ, 猫(p.84)やイモリ(p.78)やタツノオトシゴ(p.91)までである。
 24) ここで想起されるのは, 西洋人に親しまれてきた「ダフニスとクロエー」(Longus作, 2世紀後半-3世紀前半)の物語である。それは, レスボス島の牧草地の山羊飼いの少年ダフニスと, 羊飼いの少女クロエーの恋の物語であり, 二人が接吻や抱擁の快楽を覚えてから, ついに性愛の最終的な形である性交に至るまでが詩情豊かに描かれている。ダフニスは接吻や抱擁だけでは充たされないものを感じ出し, 山羊の交尾の真似をして, クロエーに抱き付いたりするが, うまく行かない。ダフニスが性交の仕方を学ぶのは, 好色な人妻の実地指導によってである。この点, 兄妹始祖神話と違って, 近代的合理精神に合うものである。

文 献

- 姉崎正治 1952「切支丹宗門の迫害と潜伏」同文館。
 安藤精一・片岡弥吉・千葉乗隆・村上重良・森嘉兵衛 他(校注)1972「日本庶民生活史料集成 第18巻 民間宗教」三一書房。
 海老原有道・H. チースリク・土井忠生・大塚光信 他(校注)1970「日本思想大系25 キリシタン書・排耶書」岩波書店。
 Edinger, E.F. 1972 "Ego and Archetype" New York, G.P. Putnam's Sons.
 Eliade, M. 1962 "Mephistopheles et l'androgynie" (宮治昭訳「エリアーデ著作集 第6巻 悪魔と両性具有」せりか書房 1973)。
 Heidegger, M. 1979 "Sein und Zeit" fünfzehnte Aufl. Tübingen, Max Niemeyer.
 福田晃(編)1990「日本伝説大系 第15巻 南東編」みずうみ書房。
 Jacoby, M. 1980 "Sehnsucht nach dem Paradies" (松代洋一訳「楽園願望」紀伊国屋書店1988)。
 Jung, C.G. 1963 "Memories, Dreams, Reflections" (ed. by Aniela Jaffe) (河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳「ユング自伝2」みずうみ書房 1973)。
 紙谷威広 1986「キリシタンの神話的世界」東京堂出版。
 紙谷威広 1990 津波に沈む島の伝承—兄妹始祖神話の比較民俗学的研究—「民俗学の進展と課題」(竹田旦編)国書刊行会 pp.507-527。
 金子大栄(編)1964「親鸞著作全集」法蔵館。
 Longus (松平千秋訳)1987「ダフニスとクロエー」岩波文庫。
 Neumann, E. 1955 NarziBmus, Automorphismus und Urbeziehung, In: "Studien zur Analytischen Psychologie, Bd.1", Zurich, Rascher.
 日本聖書協会 1975「聖書」。
 田北耕也 1954「昭和時代の潜伏キリシタン」日本学術振興会。
 Tillich, P. 1957 "Dynamics of Faith", New York, Harper.

(博士後期過程)